榛名神社社報

発行日　平成十六年七月十五日
発行所　沼田市榛名町二八五一
電話〇二七八(22)二六五五
(23)五一二二
発行人　金子由紀子

榛名神社由緒

鎌倉時代、榛名山御師の活動により榛名神社の信仰が広められ、榛名様が勧請されました。やがて、榛名宮は建長七年（一二五五）には沼田郷総鎮守と崇められ、やがて正応元年（一二八八）春名権現再建立、同じく三年、鐘が鋳造され奉納されたという記録があります。

また、一二九八年、上野国神名帳に寶高大明神（武尊様）、薄根大明神（天神様）の名がみえ、また一書には武尊様は九世紀、ホタカ山から御神体として石を持ってきて現在の沼田公園内にお祀りしたとあります。

その後、戦国時代となり、沼田万鬼斎顕泰は武尊様の社地に新たに城（倉内城）を建てることを決め享禄二年（一五二九）上を武尊大明神、中を榛名大権現、下を天満天神として現社地に合わせ祀り、社殿を建立。元和元年（一六一五）真田信之公が改築し、現在に至っています。

明治二年、神仏分離令が発令され、榛名大神と改め、明治五年氏子分離の訴訟により、上之町等六ヶ町は須賀神社の氏子に改め、現在の氏子区域となっています。

以後、明治六年郷社に定められ、昭和三年縣社に昇格、戦後は宗教法人となりました。

また、諏訪大神は、古来瀧棚（上町）に鎮座され寛政年間に榛名神社の西に遷座せられましたが、明治四一年合祀されました。

当社は、沼田氏・真田氏・本多氏・土岐氏と代々城主の崇敬を受け、数々のご奉納の記録があり、現在も本殿の御扉の上には真田家の家紋である六紋銭が描かれ、また本多正永公御奉献の木造鳥居は、補強工事を完了し、現存しております。

＝社頭講話＝

祇園祭ーおぎょんー

当社の恒例大祭は八月三、四、五日に行われる祇園祭で「おぎょん」の名で昔から親しまれています。

「おぎょん」は、氏子だけでなく、広く利根沼田の人々から親しまれてきました。

「おぎょん」の進め方

六月の参与総代合同会議において、宮番町が決定されます。（くじにより十二年に一度あらかじめ決定されている）今年の宮番町は、上原町です。宮番町においては、「御旅所（仮宮）」（お仮屋と呼ぶことが多い）を定め、祭典中、中心となって奉仕。今年のお仮屋は昨年同様、西倉内町の大手前ふれあい広場です。

三日　御神璽奉遷祭　ひき続き　神輿発幸祭
　八時から二時半頃まで車での渡御
　三時半、柳町出発、奉仕団による渡御
　県社会の山車（まんど）に迎えられ、六時お仮屋に着御するまで渡御は続く。
四日　午後五時　恒例大祭（お仮屋にて）
五日　午後四時　還御の準備を始め、神輿にさらしを巻き始める。準備が出来次第、仮宮発御祭
午後八時過ぎ、市役所広場にて天王様との競演。その後、渡御は続き、午後十時、勇壮に宮入。すぐに本殿還御祭が斎行される。日本国万歳が三唱され、祇園祭は終了する。

〈神輿と山車（まんど）〉

神輿渡御には町内廻りといっていろいろの定めがあり、厳重に守られていました。特に須賀・榛名の両神輿が一緒になったときには、本町を廻るときには榛名先頭、表町を廻るときには須賀先頭と定まっていました。

まんどうはまんどと呼ばれ、万灯をつけて奉納したため、そう呼ばれたといわれています。

まんどは町内ごとに立てますが、元来氏神への奉納でありました。そのため三日の夜には奉納のための参拝があり、四日の朝には氏神でない方へ奉納する慣わしがありました。

〈みこしの掛け声〉

わっしょい　わっしょい

和し背負いの変化。尊いお神輿をかつぐのだからみんなで和しあって背負うということで、神輿の掛け声として最適。

時代とともにいろんな掛け声が出てきました。

せや　せや

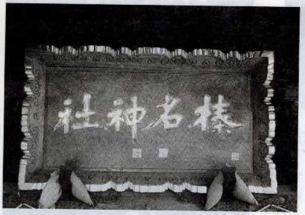
手を添えや添えや…

江戸蔵前の人夫が米俵を扱うときの掛け声がもとです。

おりゃ　おりゃ

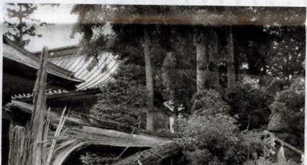
俺ここだぞ　俺や俺や…

浅草のお兄さんが仲見世通りで見知りの娘に叫ぶ声がもとです。



【久米民之助先生御揮毫額】

拝殿正面の社名額。昭和四年、久米民之助先生の御揮毫ご献納のものを、昭和五十九年、拝殿修復の時に金箔を新しくして現在に至っています。



【台風６号で神木倒れる】

六月二十一日の台風六号により、境内の杉が倒れましたが、ありがたいことにご本殿・拝殿ともに被害なく、神々様に感謝申し上げているところです。

神社Q＆A

Q・かついだ神輿（みこし）を揺り動かすのはなぜですか。

A・神社で神輿を用いるのは、祭礼にあたっての神幸祭（しんこうさい）のときです。神幸とは、御神体が本社から御旅所に渡御することをいいます。このとき、氏子たちが神輿をかついで各町を練り歩きますが、そうすることで神さまに各町をご覧いただくのです。神幸の途中、神輿を上下左右に振り動かしたりして、わざと荒々しく扱うことがあります。これは神輿に坐す神さまの「魂振り（たまふり）」で、これにより神さまの霊威を高め、豊作や疫病の退散がなると信仰されているのです。

Q・おみくじは木の枝に結んでいくものですか。

木々のみなぎる生命力にあやかり、願い事がしっかり結ばれますようにとの祈りを込めて、人々はおみくじを木の枝に結びますが、その結ぶという行為そのものに、私たちの祖先は神秘的な力を信じていたのです。そして、現在でもその伝統は生き続けています。ただし、境内（けいだい）の木々にやたらとおみくじを結びつけられては、景観がそこなわれることもあるでしょう。そのため「おみくじ結び所」が設けられている神社では、そこへおみくじを結びつけて、さらなるご加護をお願いしたり、あるいは心願が達成するまで、おみくじに記されている教訓を戒める意味で持ち歩き、そののちに神社へお礼を込めて納めるのが最もよい方法です。